



地人館
E-books

デモ版 pdf

ハッピーリタイア54歳 その時とその後の18年

見果てぬ夢を、夢で終わらせることなく、
当たり前の日常を生きる。

桐野 裕 著



まえがき

私は、54歳の誕生日をもってリタイアした。リタイアしようと決めたときは、たんなるリタイア願望の夢物語にすぎなかったし、自分でもできるはずがないと思っていた。それが、当初の予定より4年早く、また、通常の定年よりかなり早く実現した。

その間に経済的成功を収めたわけでもなく、リタイア実現のために他のすべてを犠牲にしたわけでもない。必死に努力するというのは私の性分に合わないし、できれば軽やかに生きたいと思っている。

とはいえ、リタイアをめざして、毎日ひとつのことをやり続けた。「やり続けた」と能動態で言うよりは、むしろ「やり続けさせられた」と受動態で言うほうが正しい。その結果、いつの間にか、リタイアなんてできるはずがないという否定的考えがなくなり、リタイアするのを当然のことと思うようになった。この心の変化がお金の使い方にも影響して経済的準備が進み、最終的にリタイアすることができた。

私は、自他ともに認める意志の弱い飽きっぽい人間で、途中で放り出したものは数知れない。それに「金持ち父さん」のような金持ちでもない。そんな私がリタイアという目標を比較的若く

して実現できたのは、リタイアへの努力を続けられる仕組みをつくったおかげである。その仕組みは、少し変わっているかもしれないが、そんなに難しいことではない。

「やればできる」といくら精神論を振りかざしても、経済的裏づけがなければ、できないものはできない。逆にいくらお金があっても、リタイアが目標としてはつきりしていなければ、やはり実現できない。精神論と経済論の両者がかみ合ってこそ、はじめてリタイアが可能となる。

この本は、私がリタイアを決めてから実現まで、年齢でいえば40歳から54歳までの精神のおよび経済的歩みを、時間的経過に絡ませて書いた記録である。

リタイアを考えている人、そして定年後の生き方を検討したいと思っている人に、私の経験が少しでも役立てばうれしく思う。

リタイアして2年後の2005年、筑摩書房から『思いどおりにリタイアできる人生設計術』を刊行した。以上は、その「まえがき」である。

それから16年以上が経ち、働き方に対する考えはずいぶん変わった。高齢化が進むにつれて、標準的な定年年齢が60歳から65歳になり、現在は企業に対して、70歳まで働く機会を確保することが努力義務とされている。

「人生100年時代」という言葉が広まり、いずれ80歳まで働かなければならないといわれている。しかし、日本の平均寿命の将来推計を見る限り、2050年代中頃でも女性90・40歳、男

性84・02歳と、現在より3歳くらい延びるだけで、100歳には至らない（内閣府『高齢社会白書』令和元年版）。「人生100年時代」は、インパクトの強いキャッチフレーズと考えて、あまり深刻に受け止めなくてもよいだろう。しかし今後も、定年年齢が延びることは間違いない。

定年年齢が延びる一方で、残業を減らす動きが強まり、週休3日制が話題となるなど、ワークライフバランスが変化している（この言葉が使われはじめたのも、そんなに古いことではない）。同時に、サイドビジネスを認める会社が増え、収入のすべてを会社に頼らない可能性が開かれている。2020年冬頃から流行しはじめた新型コロナウイルスにより、リモートワークやウェブ会議が広く行われるようになり、コロナが収束しても、元に戻ることはないだろう。

ワークライフバランスの変化、サイドビジネスによる「会社がすべて」という意識の変化、さらにリモートワークによる就業形態の変化により、会社に出かけて働き、収入を得るという古典的な労働概念が崩れつつある。

労働概念が変われば、リタイアのあり方も変わる。リモートワークやサイドビジネスを自宅で行うような、負荷の少ない働き方が広まれば、現役で働くこととリタイアの区分は曖昧となって、多様なグラデーションが生ずる。

現在では、私のような働き方とリタイアの仕方は、多くの選択肢のうちのひとつに過ぎないだろう。しかし、いまだ少なからぬ割合を占めているから、私の経験も、少しは役に立つだろう。

リタイアについても、FIREという、若くしてリタイアする新しい動きがある。これについ

ては第3章で取り上げるが、この本で書きたいことは、一部のリッチなリタイアではなく、家庭を持つ人間による普通のリタイアである。

現在72歳、リタイア生活は18年になった。はたして前回の書名のように、「思いどおりのリタイア」ができたのか。リタイア前に考えていたことと、実際はどう違ったのか。予期しないことは起きなかったのか。

そんな「リタイアのビフォー・アフター」を報告するのが、この本の目的である。本書は、以前の本にかなり手を入れ、さらに「アフター・リタイア」の章を書き加えた。

もくじ

まえがき 2

第1章 リタイアとは—— 7

第2章 リタイアを決めるまで—— 18

第3章 リタイアの経済論—— 32

第4章 リタイアという目標に向かつて—— 65

第5章 転機からリタイアまで—— 82

第6章 リタイアしたあとで—— 97

最後に 130 電子書籍版へのあとがき 134

第1章 リタイアとは

今、この本をご覧になっっているあなたは、「まえがき」の「54歳でリタイアした」という言葉に興味を惹かれているだろう。54歳でなく65歳ならば、たんに定年で辞めたにすぎないのだから。そして、次のようなことを考えているかもしれない。

- ・ どうせベンチャー企業のオーナーか、大企業に勤めるリッチな人間が書いた自慢話だろう。
- ・ あるいはその逆で、食べるものも食べずに、必死に努力した男の苦労話だろう。

残念ながら、いずれの考えも当たっていない。私は「金持ち父さん」ではないし、「必死」というのが苦手な人間である。

人間を、経済力・精神力・体力で評価すれば、私は、いずれも平均を上下する程度の人間である。日本人の好きな中流意識でいえば、まあ「中の上」というところ、と思いたい。そんな人間でも、やる気になれば定年前にリタイアできる、それがこの本のテーマである。

「やる気になれば」は、正確には、「やる気になっただけではダメで、その意志を持続できれば」である。正月元旦には、やる気になるのだが、いつのまにか忘れてしまうのが人間の常だから。

第6章 リタイアしたあとで

実際にリタイアしてみると、現実にはリタイア前に考えていたのと違い、私の考え方も変わった。そんなビフォー・アフターを話そう。

ここからは、リタイアという言葉を、定年前に自発的に辞める本来のリタイアのほかに、定年で辞めることを含んだ意味で使う。

リタイアは人生の第2幕

リタイアして、比喩的に「新しい」人生がはじまるというが、すべてが新しくなるわけではない。住んでいる所は同じで生活環境は変わらないし、仕事以外の人間関係はそのまま残っている。なによりも当然の本人がなんら変わらない。私についていえば、骨折した足はそのままだし、だらしない生活スタイルが改まるわけでもない。生まれてからリタイアまでに身につけた知識・能力、生活習慣・人間性は変わらない。第2の人生というが、新しい人生がはじまるわけではなく、人生の第2幕が開くにすぎない。

リタイアという第2幕の舞台は、人によりさまざまである。旅行、ドライブ、アウトドア、鉄道巡りなど家を離れて動き回るもの、映画・コンサート、スポーツジム、食事などの外出型、ガーデニング、囲碁・将棋、読書などの自宅ですることなどである。週に数日だけ仕事する人もいるし、ボランティアなどの社会活動もある。公民館・集会施設での行事、町内会役員など地域での活動、さらには生活の本拠を変える移住があり、移住先で蕎麦屋や民宿をはじめめることもある。以下、私の第2幕の様子を述べながら、リタイアのあり方について考えよう。

リタイアした後の頃

リタイアしたあと、手をつける余裕がなかった部屋の片づけにはじまり、疎かにしていた家のメンテナンス、たとえば網戸の張り替えなどをやり、物置をはじめさまざまところを片づけた。現役時代の30年間に溜まっていたことを終わらせるのに、数か月かかった。

引き継ぎを済ませた会社との関係は、サラリーマンのように定年退社すれば、それで終わりと
いうわけにはいかず、半年くらいはたびたび出かけた。

自宅にすることで、行動範囲が郊外の住宅地に変わり、買い物や飲食の場所が駅ビルや郊外型の店舗になった。平日に見る街の様子は、それまで知っていた休日とはずいぶん違った。休日は家族連れで賑わう朝のマックでは、幼稚園のお迎えバスを見送ったママさんたちがおしゃべりしている。店内には高齢男性の一人客が多く、若い年代は営業マンを見かける程度である。駅ビル

には、当時54歳だった私のような男性は少なく、圧倒的に多い女性の中で、場違いな感じがした。同年代の友人はみんな仕事をしていた、遊び相手がいらないのには困った。そんな異邦人なような環境に慣れ、リタイアの生活ペースをつくりあげるまでに、やはり半年くらいかかった。

考えてみれば、平日の街の様子がわかったのはリタイアしたからである。リタイアとは、平日に働いて得るお金と引き換えに、自由な時間を手に入れる、すなわち時間の自由である。

リタイアして有難いのは、時間に縛られないことだ。どんなに疲れていても、現役なら決まった時間に起きて出勤しなければならぬが、リタイアすれば、ゆっくり寝ていてもかまわない。時間が決められた用事や約束があるが、それ以外は、朝から晩までどう過ごすかは自由である。朝早くゴルフに出かけてもよいし、夜遅くまでテレビを見ていてもよい。何をしてもなく、気儘に一日を過ごしてもよい。この自由を、一日の過ごし方に関する自由とすれば、もうひとつの自由がある。

リタイアして長期の旅行に簡単に出かけられるのは、自由に日程がとれるからである。現役では休みを取らなければならないが、リタイアすれば好きなときに出かけられる。この日程の自由こそリタイアの特権である。

長期の旅行に出かけることはリタイアの典型例だが、それが可能となるのは、時間を自由にできるからである。リタイアの本質は、表面的な「コト」(行動)ではなく、それを支える「トキ」(時間)なのだ。

リタイアのイメージとして、長期旅行のような「絵になる行動」が思い浮かぶが、それがリタイアのすべてではない。家でゆっくり過ごすのもリタイアであり、実際は、そのほうが多い。活動的な人も、いつも外で動いているわけではなく、トータルでは家にいる時間の方が長いだろう。家で過ごす日常は、当たり前前すぎて絵にならないが、実は、リタイア生活の中核をなしている。

バンクーバー再訪

リタイア生活の中核が、家での日常にあることを確認したうえで、リタイアによる夢の実現という絵になる動きを考えてみよう。そのために私の例をあげる。

リタイア後しばらくして、楽しみにしていたバンクーバー滞在の旅に出かけた。着いた日の翌日、公園を散歩したあと、入江に面するレストランで昼食をとった。快晴である。8月のバンクーバーの空はあくまでも高く、吸い込まれるような青さだ。夏の翳りをかすかに感じさせる風が、静かな入江に小さな波を立てている。右手奥には、アラスカ行きのクルーズ船が停泊し、手前には個人の豪華なヨットが並んでいる。遠くからバグパイプの音が聞こえる。そのひしゃげた聞き慣れない音色を聞いて、ここは日本ではないこと、もう仕事をしなくてよいことを、あらためて実感した。

それまで2回訪れて好きになり、リタイアしたら長期滞在しようと思っていたバンクーバー、それは私にとってリタイアの象徴だ。ついにリタイアが実現し、今こうして昼間からビールを飲

んでいる。夢のようだ。使うのが恥ずかしくなるような言葉だが、やはりそうとしか言えない。リタイアした喜びが、ほんとうにこんなことをしてよいのだろうか、という戸惑いを引き摺りながら湧き上がってくる。

2杯目のビールを頼んだとき、入江の向こうの山は、以前Gさんの家から見た山であることに気づいた。テラスへ出て後ろを振り返ると、彼が住んでいる建物が見えた。ホテルへの帰り道をとぼと歩いたときから、かれこれ2年近くが経つ。「Gさん、ついにリタイアしましたよ」。夜に電話で言おうとした言葉を呟いた。

彼が住む建物の先には、オフィス街のビルが見える。ビルの中では、たくさんの人が働いている。私はもうビルの中で夜遅くまで働かなくてよいし、アポイントに追われることもない。なによりもカウントダウンボードの数字を入れ替える必要がない。新宿副都心のビルを見てリタイアしたいと思ったとき、今、この場所にいることなど想像できなかつた。カウントダウンボードに象徴される、ひとつの時代が終わつた。ゼロを示したままドアに掛けられているボードを、帰つたらはずさなければと思いつながら、再びレストランに入った。

バンクーバー滞在中、仕事に関する夢をずいぶん見た。やはり不思議と関係が深かつた人たちが登場してくる。夢を見ることが、その人たちとの別れの儀式のように、そして一枚一枚薄紙を剥ぐように、自分から仕事削ぎ落とされていった。

いつときバンクーバーへの移住を考えた。物価・住居・医療福祉などの生活条件は悪くなかつた。

しかし、いずれ介護が必要になるだろう母親、そして孫を含む家族を考えると難しかった。それが正解だったことは、あとで話そう。

最後に（旧版）

昭和24年生まれの際は、団塊の世代に属する。団塊の世代は、戦後日本の復興期から成長期を経て成熟期に至るまでを、自分の年齢と重ね合わせて生きてきた。子供の頃、日本はまだ貧しく、家族を養うために一生懸命働く親の背中を見ながら、私達は育った。

学校に通い出した頃、いつの間にか冷蔵庫が氷から電気に、ラジオがテレビに変わった。戦後をゼロ歳として生まれた「戦後日本」の苦難の冬が終わり、芽吹きの春が訪れて人々は豊かさを享受しはじめ、さまざまな分野で既成の枠を破った新しい流れが起こった。高度成長期の日本は、同時に私達の青春時代でもあった。

戦後日本の夏の時代だったバブル期は、私達が40代になり、消費行動が拡大したことと無縁ではないだろう。夏祭りの高揚のあとに退潮の秋が訪れたとき、団塊の世代も、定年間近という人生の秋の夜寒にいる。今年が昭和80年あたり、昭和20年生まれの戦後日本は、ついに還暦を迎えた。人生80年を四季に分けると、いよいよ玄冬の時代に入る。

団塊の世代の私達は、はたして迫り来る冬の備えができているのだろうか。「アリとキリギリス」の寓話にならえば、私達の親は、冬に備えて働きに働くアリだったし、私達の子供は、冬のこと

を考えず無邪気に遊べるキリギリスだろう。日本が貧しかった頃に親の背中を見て育ち、しかしその後の豊かさに慣れてしまっている私達は、もはや勤勉一途のアリにはなれないし、かといつて不足を知らないキリギリスになりきることもできない。

団塊の世代は、日本の人口構成に生じた異常事態であり、私達が歳を重ねることは、いわば大きな生き物を飲み込んだ蛇の体の中を、異常に膨らんだ部分が順次移動していくようなものである。私達のライフステージの各段階で、日本の社会制度という蛇は、ぶつくり膨れた異物を飲み下すために、必然的に骨格に変化が生じざるを得なかった。その意味で、団塊の世代は、つねに既成の枠に異議申し立てをする、戦後日本が生んだ鬼っ子なのである。

そして今、ついに団塊の世代は、定年という大きな関門にさしかかり、それに対して、65歳定年延長制などの対応策が練られている。老いつつある日本という蛇は、今回もまた、異物をうましく飲み下すことができるだろうか。それは、わからない。ただ私達は、青春期に身につけた変幻自在な心と、子供時代に見た親の背中を忘れることなく、造りの悪い関門をすり抜けようと努力するだろう。大きな目でみれば、リタイアしようと考え、それを実行に移した私の行動も、そんな試みのひとつなのかもしれない。

私は、自分と家族が生活するために働いてきた。仕事が厭になったこともあったが、メシを食うために、そしてメシを食わせるためには働くしかなかった。しかし、今やリタイアという夢は実現し、働くこと、そしてリタイア実現のための努力は必要なくなつた。

夢は実現してしまえばもはや夢でなく、それは抜き差しならない現実となる。叶えられた夢が現実となったとき、その中から人間はまた新たな夢を紡ぎだし、その実現に向かつて歩み出す。だから、また新しい山頂を目指して歩きはじめようと思う。アリのように地道に、しかし心はキリギリスの軽やかさをもって。

そんな自分自身に、そして人生のハードル・レースを駆け続けている、この本を読んでいたあなたに、私の好きな、そしてアリの本領を發揮した詩を贈ろう。

我等は互に会得せんと勉励する

一つの前廊を建てんと勉励する

煉瓦に煉瓦を重ね

苦痛に苦痛をもつて

セメントと涙とで

我等の老いた時の或る日に

追憶の前に坐り

我々は我々自身を黙想するために

西脇順三郎「恋歌」より

*前廊…ギリシャ神殿の入口にある、柱で囲まれた廊下のような部分（筆者注）。

この本が今ここにあるのは、現役時代に私を支えてくれた多くの方々のおかげであり、そのサポートがなかったら、リタイアできなかった。ひとりひとりの顔を思い浮かべながら、あらためてお礼を申し述べたい。とりわけ、リタイアを決めた夏休みに会った友人、リタイア実現に役立つ各セミナーの講師・通訳そして関係者の方々に心から感謝するとともに、この原稿を取り上げ、さまざまな目配りをいただいた筑摩書房編集部磯部知子さんに、厚くお礼申し上げます。

平成17年9月

桐野 裕

電子書籍版へのあとがき

前回の本はリタイアして2年後に書いたため、リタイア後のことは、ほとんど書かれていない。リタイア後の様子を報告する必要があるし、自分でもキチンと振り返ってみたいと思っていた。そんなとき、大学時代の友人から電子書籍出版の話聞いて、願いが叶えられた。

前回の出版から16年が経って、社会的・経済的状况が大きく変わり、当時の記述が現在にそぐわない部分がある。それが顕著な経済論では、一般的な記述を削り、私の体験談を中心に再構成した。その結果、リタイアまでの歩み、経済論、リタイア後の状況の三者のバランスの取れた構成になった。

本書出版のきっかけと、編集者として良きアドバイスを与えてくれた、畏友大角修氏に厚く御礼を申し上げる。

2022年1月

桐野 裕



地人館 E-books ondemand

紙面のイメージは電子版とは異なります。

桐野 裕 (きりの ゆたか)

1949 年生まれ。東北大学文学部卒業後、不動産関連業に従事。
40 歳のとき早期リタイアを決め、物心両面での努力をする。
2003 年、当初予定より 4 年早く、54 歳でリタイアする。

ハッピーリタイア 54 歳 ^{さい} その時 ^{とき} とその後の ^ご 18 年 ^{ねん}

著者 ^{きりの ゆたか} 桐野 裕

2022 年 3 月 8 日

発行 ^{ちじんかん} 地人館

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.com>

印刷・製本 有限会社 朋栄ロジスティック

©2021 Yutaka Kirino